

逆境からのプレーボール ―村山実―

「こら、一朗！ 頭を下げんか！」

ベンチから飛んできたかんとくのどなり声に、ぼくは、マウンドでしぶしぶぼうしを取って、ほんの少し頭を下げた。

なん式少年野球の秋季大会準決勝戦、ぼくたちのチームが二対〇でリードした最終回、ツーアウト満塁でデッドボール、おし出しだ。二対一。点差は一点になった。

タイムをとって内野手がぼくのところを集まってきた。

「ドンマイ、ドンマイ。」

「あと一人だ。気楽にいけよ。」

みんなは、そう言ってぼくをはげます。

でも、ぼくは顔を上げずに、無言でマウンドの土をならし続けた。

「じよう談やない。そもそもツーアウトランナー一塁の場で、サードゴロをお前がエラーしたからピンチを招いたんやないか。あれがアウトなら試合は終わっていたやろ！」

ぼくは、気楽にいけよと声をかけてきたサードの克治に腹を立てていた。

「エラーしたお前が言うな！」と言い返したい気分だった。

そのエラーのおかげでフォアボールを出し、そしてデッドボールで失点だ。

「あれもこれもおまえのせいや！」

ぼくは腹の中で克治にどなっていた。

イライラした気持ちは収まらず、次の打者をむかえた。ぼくの不機げんが伝わったのだろうか、それまで勝利目前で盛り上がっていた応えんする人たちの声も小さくなっている。

ぼくは、力まかせに第一球を投げこんだ。

「あっ！」

吸いこまれていくとは、こういうことかと思った。ボールはぼくの手元をはなれ、ストライクゾーンのと真ん中へ遠ざかっていった。カーンというすごい金属音がして、打ち返されたボールは、レフト頭上を大きくこえていった。

三塁ランナーに続いて、二塁ランナーもホームイン。二対三。

試合終りよう。ぼくたちのチームの逆転サヨナラ負けだ。

家に帰ったぼくは、げん関にバグとバットを投げ出した。どろにまみれたユニフォームを、着がえる気分にもならなかった。

「おっ、一朗、もう帰ってきたんか。」

リビングからぼくを見つけて、父さんが話しかけてきた。父さんは、いつものように今日のぼくの試合に応えんに来てくれていた。もちろん、ぼくがサヨナラヒットを打たれたところも見ていたにちがいない。

ぼくは返事をせず、くつをぬいでいると中で、げん関にねそべった。
「ちくしょう！」

はき捨てるように言ったぼくに、父さんが言った。

「くやしいか。」

「あたりまえや！」と僕は心の中で毒づいた。

「村山実の心境というところか、天覧試合の。」

と言って、父さんは笑った。

「人の気も知らないで……。」

ぼくは笑った父さんに腹が立った。

「知っとるか？ 村山実。おまえの好きな阪神タイガースの元エースやで。」

「えっ？」

タイガースと言われると、ぼくは無意識に反応してしまう。

「父さんはまだ生まれとらんかったころや。じいちゃんから聞いた話やけどな、昭和何年やったか、東京の後樂園球場で阪神対巨人の試合で村山さんは、くらったんや。」

「よりによって、ジャイアンツにかよ……。」

ぼくは上半身だけ起き上がった。

「その試合には天皇陛下と皇后陛下が観戦に来られたのや。天皇陛下がご覧になることを天覧いうて、すもうなんかでもあるやろ。そこで村山さんは、一発浴びたんや。今日のお前みたいなヒットやなしに、九回裏、同点でホームラン打たれたんや。しかも、打ったのはあの長嶋茂雄さん。天皇陛下の前での劇的なサヨナラホームランで、そりやもう、長嶋さんは一やく大英ゆうやで。その時、村山さん、新人の年やったんやで。」

ぼくは立ちあがり、アンダーストッキングをぬぎ、はだしになって、リビングに入った。

「そりや、村山さん、ショックやったろうよ。くやしくてくやしくて、きつと、今日のお前と同じようにな。」

自分のことには取り合わず、ぼくは、父さんに聞いた。

「それで村山さん、どうした？」

「どうしたもこうしたもないわ。そこで野球をやめるわけにいかんやろ。じいちゃんが言っとったが、そこから村山さんは奮起したんや。その年十八勝をあげて、阪神のエースになった。くさってばかりおられん、きつとくやしさをバネにしたんやろな。」

ぼくはだまって聞いていた。

「さっき、お前そこでふてくされとったやろ、くやしくて。でも、そのくやしさはだれに向けたもんやった？」

「ここであるのかよ……。」

ぼくはだまっていた。

「フォアボールもデッドボールも、みんなのせいにとったんやないんか？」
父さんはお見通しだった。コップの水をぐくりと飲んで、父さんは話し続けた。

「父さんはな、子供のころ、よくじいちゃんから村山さんの話を聞いてたんや。じいちゃんは、熱きような村山ファンやったんや。」

話がぼくから村山さんにもどってくれたので、少しほっとしたが、さっきまでねころがってふてくされていた自分を少し反省していた。

「とにかく、村山さんは負けず嫌いでな、自分がストライクだと思った投球をボールだと判定されると、泣いて主しんにくってかかった。退場を宣告されて、ベンチにもどっても納得がいかず、チームメイトのかたに顔をつけて泣き続けたという話もあるくらいや。」

「負けずぎらいは似ているけど、ぼくには、そこまでの根性はないな。」と思った。

「でもな、おもしろい話があつてな。長嶋さんにサヨナラホームランを打たれたのが、カウント2エンド2からの五球目やったんや。村山さんはインコース低めのシュートで少しゆさぶって、2エンド3にして六球目で勝負のつもりやった。そして五球目、思い切りインコースに投げこんだのが、高めにういたんや。それを、ガツンと打たれた。数日後、天覧試合の翌日に長嶋さんと王貞治さんが対談した記事を読んで、村山さんはがく然とする。」

ぼくは父さんの話に聞き入っていた。

「サヨナラホームランについて話している途中で、長嶋さんが『ところでワンちゃん、あれカウントいくつだったっけ?』って聞いたんやって。王さんがあわてて『2…2ですよ。』と言う。

長嶋さんは『ああ、そうだったっけ。』ときた。村山さんはうなつた。自分はカウントを重視して勝負にいったのに、相手はそんなことおかまいなしだ。それを知って村山さんは、あつさりだつぼうする。『かなわんな、長嶋さんには。』と、このあたりがえらいと思うんや。こういうけんきよさがあるから、あのホームランを打たれたことをバネにできたんやろな。」

そこで、父さんはまた水をぐくりと飲んで、言った。

「最大の失敗は、最大の幸運へのプレーボールである。」

「なに、それ?」

「村山さんが、本に書いとるんや。なんていうんかな、失敗してくさつとつたら、先へ進めへんということやろな。父さんはそう思って、この言葉を大事にしとるんや。」

ぼくは、さっきの試合について考えていた。父さんは話し続けた。

「調子のいい時は、目の前にたくさんの人がいて、手をさしのべて引っ張っていつてくれるように感じる。ところがな、逆境におちいると、そういう人がだれもおらんようになってしまふと、村山さんは感じて腹を立ててたそうや。ところが、時間がたつて考えると、自分の後ろにいて支えてくれる人が、たくさんおつたことに気づいた。目に見える人だけが、自分を支えてくれているんやないって気づく。試合でカッコしても、どこかで自分を冷静に見つめることができたから、あんな小さな体でエースになれたんやろな。さすがやで、村山さんは。」

ぼくは、今日の自分自身を思い返して、下を向いた。

「でもな一朗、失敗にくさらず前へ進んでいった村山さんは、えらいな。」

ぼくは、顔を上げて父さんの顔を見た。父さんは、にっこり笑った。